

『林羅山の朱子学の発展と朝鮮の書物』

東明情報大学校助教授 成 海俊

ただ今紹介していただきました成海俊と申します。どうぞよろしくお願いいたします。まず「近世京都の学問と東アジア」というテーマのもと立命館大学でこのような素晴らしい研究会が開催され、私を呼んでいただいた桂島先生をはじめ関係者の皆さまに心からお礼を申し上げます。

私からは「林羅山の朱子学の発展と朝鮮の書物」というテーマですが、私は『明心宝鑑』と関連がある京都出身の儒学者、林羅山と関連づけて発表するつもりです。日本の『明心宝鑑』はすでに室町時代に、東陽英朝という僧侶によって『禅林句集』という書物に引用されたあと、江戸時代に藤原惺窩の『寸鉄録』、今日発表する林羅山の『童蒙抄』、あるいは小瀬甫庵の『政要抄』、浅井了意の『浮世物語』、貝原益軒の『大和俗訓』『和俗童子訓』などなどの儒学者、あるいは近代に近いところでは山東京伝などの戯作者にも広く読まれ、関連書物に引用されています。

日本では主に日本と関係あるものを研究しましたが、帰国してからはもう少し視野を中国・韓国・日本など、東アジア全体に広げて、比較しながら、研究を続けています。『明心宝鑑』は東アジアのみならず、文禄・慶長の役と関係がありますが、すでに一五九二年、あるいは一五九五年というところもありますが、スペインの宣教師のコボという人によってスペイン語に翻訳されました。その翻訳された版本が今日発表する朝鮮版の清州本です。しかもコボは九州の名護屋で秀吉と直接会っています。『明心宝鑑』の版本も秀吉の朝鮮進出のときに渡ってきた朝鮮版『明心宝鑑』だと私は考えています。というのは、コボの翻訳本に『明心宝鑑』の著書に清州本という名前が書いてあるからです。おそらく西洋人ですから、清州本の三字が東洋人の名前だと勘違いしたのではないかと思います。

このように清州本は中国から朝鮮、そして日本に渡って、非常に華やかに受け入れられて、それが日本からスペイン、そしてスペインに渡ったものがドイツやフランスへと渡り、当時の有名な文学者ボルテールあるいはケネ、ライプニッツなどに読まれ、その後英語やドイツ語に翻訳された書物です。ということで今日は、文禄・慶長の役と『明心宝鑑』に絞って林羅山の思想的特徴をみることにします。

先ほどのお二方の発表では新しいものが出されましたが、私の発表は、新しいものというよりは一般的なものを含めてレジメをつけておりますので、その点ご了承ください。では原稿に基づいて発表を進めていきたいと思ひます。

1. はじめに

まずはじめに、韓国と日本は有史以来多くの交流を続けてきました。古代の朝鮮半

島経由の儒教・仏教・道教などの精神文化など、さまざまな学問と技術が伝来されました。これと関連して、阿部吉雄氏は日本が統一国家として一大革新を成し遂げ、大化の改新と明治維新の時代の指導思想として儒教を取り上げています。律令国家時代を儒教文化の咀嚼時代、江戸時代を消化の時代、明治時代を血となし肉となして、その上、西欧文明を輸血した血肉化の時代とし、これらの驚異的な発展と一大革新をなしたときには、儒教がその推進力となったとしています。なかでも特に江戸時代の新儒学が勃興した際、これを消化するのに李退溪の著述がその消化を助ける消化剤となり、栄養素の役割をしたことを指摘していますが、これは文禄・慶長の役と深い関係があります。

文禄・慶長の役は、ご承知のように豊臣政権の滅亡のきっかけとなりましたが、それによる朝鮮の人的・物的資源の日本への流入が、後の日本の文化形成に大きく貢献することになります。これに関して衣笠安喜氏は、「朝鮮には国土の破壊と荒廃を、大軍を送った日本には無駄な犠牲と巨額の出費と、そして豊臣氏の滅亡しかもたらされなかった。失ったものに比べるとあまりにも小さいが、それでも予期しない落とし子が日本にはあった。朝鮮から奪った銅活字、捕虜がもたらした製陶法、それに朝鮮朱子学の3つである」としています。また、氏によると、銅または木活字による印刷術は、後陽成天皇の慶長勅版をはじめ、家康の駿河版、天海の大蔵經、角倉了以の嵯峨本を生み、日本の印刷史上の一時期を画し、後の日本の出版文化により大きく貢献することになるのは、活字と書籍であるとしています。

日本に渡った朝鮮書籍は、関ヶ原の戦いのあとは徳川家康により収集され、家康は朝鮮書籍を中心として「駿河文庫」を作り、林羅山、そして僧侶・以心崇伝に管理を任せました。家康の死後は、この蔵書は御三家を中心として尾張、紀伊、水戸に分蔵されましたが、この御三家の中でも水戸に分蔵されたものが清州本『明心宝鑑』であります。

当時の日本に渡った書籍の量が想像できる、熊本出身の徳富蘇峰による文禄・慶長の役の記述を見ると、「当時の諸将は書物屋でも始めるつもりではなかったかと思う位皆が持ってきました。その書物を並べるなら、神田の神保町辺りの店が幾つできるかも知れないと思ふ位であります」と記しています。この説を裏付けるかのように、当時、活字・印刷器材一切を奪われた朝鮮では、文禄・慶長の役の後、約70年間活字鑄造ができない状態で、従来存在した『明心宝鑑』の原本である清州本をはじめ多くの書物の行方も分からなかったのです。

2. 文禄・慶長の役（壬辰倭乱）後の羅山の読書遍歴

この朝鮮書籍と最も深い関連を持ち、またその時に伝来された『明心宝鑑』と関連を持つ代表的な儒学者のひとりとして林羅山をあげることができます。林羅山に関する略歴は時間の関係で省略して、その後のページに進みます。

羅山の思想形成に、朝鮮の朱子学が与えた影響に関して、一般的に羅山が惺窩の弟子として惺窩から朱子学を授けられたと考えられていることに対して、阿部吉雄氏は「羅山が惺窩の門人となる前に既に朝鮮伝来の図書を多く読んだことによって思想的立場が決定された」としています。これは文禄・慶長の役に新たに渡来した多くの本を、いち早く読破したことによるとしながら「仏教や陸象山・王陽明の学を排斥した明代の『学薈通弁』、『異端弁正』『困知記』『性理字義』などはみな韓本で読んでいる」としています。ここでいう韓本は朝鮮本です。そして「これらの本は彼の思想的立場を決定する種本となった」としています。このように羅山の思想形成に文禄・慶長の役に渡来した書物が大きな影響を与えていますが、同じく文禄・慶長の役に日本に渡った清州本『明心宝鑑』、いわゆる朝鮮版『明心宝鑑』を羅山は、師匠である惺窩のように読んだのであります。

朝鮮の善書を、近世初期の幕府儒官で当時の代表的知識人の一人であった羅山が、自分の思想の一部として受け入れたことは、当時の『明心宝鑑』の受容および羅山の勸善思想を理解する上で見落としてはならない重要な事柄であると思います。しかし、今までの研究では羅山の思想形成に勸善書が取り入れられたことについて触れることはありましたが、この点を思想史的観点から深く考察した論考はありませんでした。それで本発表では、文禄・慶長の役に日本に渡った朝鮮本『明心宝鑑』と朝鮮の通信使との交流などから、羅山の思想形成に朝鮮の書物が与えた影響を『明心宝鑑』を中心として明らかにしようとしています。

2-1 羅山の『童蒙抄』と清州本『明心宝鑑』

清州本『明心宝鑑』に関する韓国の最近の言及では、壬辰倭乱（韓国では文禄・慶長の役を壬辰倭乱という）の際、消失した可能性を示唆しています。しかし文禄・慶長の役に朝鮮から渡った多くの書物をいち早く読んだ羅山が、道徳的啓蒙書である『童蒙抄』（別名『訓蒙要言録』）に清州本『明心宝鑑』のほとんどの編から幅広く引用しています。羅山が『童蒙抄』に引用した『明心宝鑑』の本文の特徴から、文禄・慶長の役の際にもたらされた清州本『明心宝鑑』であることが証明できる資料として、該当するところだけ抜粋しましたので読んでみます。

又曰、房室不在高台、不漏便好。衣服不在綾羅、和暖便好。飲食不在珍羞、一飽便好。娶女不在顔色、賢徳便好。養兒不問男女、孝順便好。兄弟不在多少、和順便好。親眷不損新旧、来往便好。隣里不在高低、和睦便好。朋友不在酒食、扶持便好。官吏不在大小、清正便好。

この引用資料の中の下線部分のところ、「養兒不問男女」から「和順便好」までは、羅山が『童蒙抄』の編纂に際して、朝鮮で刊行された清州本『明心宝鑑』を参照したと考えられる確かな部分であります。というのは、同じ『明心宝鑑』が近世日本においてはたくさん出されました。例えば多くの明刊本がありますし、清刊本もあります

けれども、この傍線部分の内容が朝鮮版清州本のみ存在し、それ以外の版本には無い内容なのです。後に明刊本を中心として和刻本『明心宝鑑』を作りましたが、和刻本にもこの内容が無いことから、羅山は確かに文禄・慶長の役に渡った朝鮮版清州本『明心宝鑑』を参考としながら、自分の書物である『童蒙抄』に引用したという証拠であると思います。

『童蒙抄』と『明心宝鑑』の関連に関しては、すでに前田金五郎氏の指摘があり、氏は『童蒙抄』の『明心宝鑑』からの引用を二五箇所、あるいは三四箇所として指摘しています。しかし私の調査によると、『童蒙抄』の中には『明心宝鑑』より引用の事実を明らかに示す「宝鑑曰く」という条が二八箇所あります。また、それ以外に前後関係から見て明らかに『明心宝鑑』からの引用であると見られる箇所を合わせると、引用の合計は一〇三箇所にのびます。私が調査した『童蒙抄』の『明心宝鑑』からの引用内容を総合すると、『童蒙抄』は他の『明心宝鑑』関連書物、例えば小瀬甫庵の『明意宝鑑』、これは『明心宝鑑』の「心」を「意」に変えただけのものです。それと『政要抄』などと比べると、漢文の引用ばかりでなく、編全体に作者の長い解説が付いています。他の引用書物が無造作に『明心宝鑑』の各編から自分の好みの内容を適当に引用しているのに比べて、羅山の『童蒙抄』の引用は『明心宝鑑』の編が二〇編ありますが、その各編の条の順番に従い規則的に正しく引用しています。

それでは、羅山の思想的特徴の大きな枠の中で『明心宝鑑』との関係に絞って、羅山の勸善思想をより詳しく検討することにいたします。

2-2 羅山の『童蒙抄』の思想的特徴

羅山の『童蒙抄』の思想的関係ですが、文化九年の記をもつ『訓蒙要言録』、これは東北大学狩野文庫にある書物ですが、ここでは明らかに羅山著と記されています。そしてまた同じような内容ですが、『童蒙抄』として宮城県立図書館青柳文庫所蔵本は三九部よりなり、その内容は儒学の道德が中心であり、『論語』『孟子』『漢書』『史記』『孫子』などの引用があります。中には『明心宝鑑』からの引用とみられる箇所があり、内容の構成も『明心宝鑑』の編集内容と類似しています。その編成の上では、『明心宝鑑』をまねていながら、『明心宝鑑』ではみられない兵書からの引用がかなりあります。例えば今は伝えられていない「六韜・三略」を各巻にわたって引用し、また『孫子』などから兵法に関する内容も多く取り入れています。これは源了円・前田勉両氏がことに注目した羅山の兵学的素養の一端を表しているといえます。その他に、羅山が関心を示している歴史・刑法などに関する部分も含まれ、博学者羅山の特徴がよく表されています。

さらに『明心宝鑑』の条文からの引用である五倫の道德や勤学、勤儉・節約を美德とした内容を積極的に取り入れています。『童蒙抄』で説いている善は、人と人との間における善の勧めで、日常生活の中で行わなければならない善の行為が主でありま

す。例えば一部を見ると、「性理書曰、見人之善尋己之善、見人之惡尋己之惡、如此方是有益」と一般的な善を説いています。

それに儒教經典に含まれる儒教の五倫の道德や、兵法・歴史書などの内容から構成されていることから、『童蒙抄』は単なる庶民教化を目的とした道德書ではなく、安定しつつある政治体制のもとで、武士やその周辺の知識人の子弟を対象として、教養と道德を説くことを目的として書かれた書物であると考えられます。これはすべての身分層を対象とした『明心宝鑑』とは勸善の違いが出てくると思われます。

『明心宝鑑』の「継善篇」にあたる『童蒙抄』の「勸善部」を中心としてみると、他の『明心宝鑑』を引用した知識人も非常にこの継善篇を注目していて、羅山もまさにそれを引用して勸善部を作っていますから、それを主に抜粋してみました。

①莊子曰、於我有善者、我亦善之。於我有惡者、我亦惡之。我既於人無惡、人能於我有惡哉。②論語曰、見善如不及、見不善如探湯。③宝鑑曰、人有善願、天必從之。

ここでは、人間の善惡行為に対する賞罰の働きを持つ天の存在が想定されていますが、天による報いがあることを理由にして人に善行を勧めることはなされていません。あくまでも善の行為者が他者との関わりの中で善・不善を判断し、善は自ら行い、不善は慎むべきであることを説き示していることから、善行に対する賞の報いなどの見返りは保証されていない善といえます。

羅山は善を生活の中で積み重ねることや、家庭または後の子孫に及ぶ善行を積むことが、家や子孫に対する勸善となり、それがやがて広く国にまで及んでいることを説いています。引用した内容を読みます。

①周易曰、積善家必有余慶、積不善家必有余殃。

これは近世の書物に多く引用されたものでもあります。『明心宝鑑』にもありますが、直接周易の本文にも出ているものです。

②司馬溫公家訓曰、積金以遺子孫、子孫未必能守。積書以遺子孫、子孫未必能読。不如積陰德於冥々之中、以為子孫長久之計。③漢昭烈將終勅後主曰、勿以惡小而為之、勿以善小而不為。④楚書曰、楚国無以為宝。⑤晋国語曰、從善如登、從惡如崩。

ここでは家ごとにあるいは子孫に善を行わせるように説いていますが、特に子孫に対しては金や財産や書籍を残すよりも、人間が人間らしく暮らしていく上で善を行うことが最も大切であることを説いています。それは家のみならず、国においても善が第一の宝であることを説いていることから明らかであります。

そこでは天や神などの強制力や、応報の働きの存在を理由にして人に善を勧めることはみられません。あくまでも行為者が自ら善をおこない、不善は慎むことを示しています。ここに羅山の勸善思想の特徴ともいえる、人間の本性は善なるものであり、道德的資質はすべての人間に普遍的に内在するという立場がみられます。もちろん他の書物にはやや違う見解もありますが、羅山の勸善書、『春鑑抄』あるいは『三徳抄』、

あるいは『訓蒙要言録』などにはこのような思想が出てきます。『三徳抄』の内容を引用しました。「心ニ善惡アリヤト云ニ、心ハ元ヨリ善也、天命ト云モ、義理ト云モ、心ト云モ皆一也、イカンゾ心ニ惡アランヤ」。

思想的面においては、『明心宝鑑』を構成している「儒教、仏教、道教」の三経合一思想から儒教思想を中心として道德の基本を説いています。他の道德的な要素はほとんど引用していません。特に『明心宝鑑』には仏教関係の条も多く含まれていますが、羅山は『明心宝鑑』を引用する際、仏教的なものは削除しています。これは羅山の排仏・排耶蘇教思想に基づいた思想的表明で、『童蒙抄』においても羅山の排仏論がよく反映されていると言えます。

特に、『明心宝鑑』の儒・仏・道の思想から仏教的要素を完全に排除し、道教的要素も控えていることから、朝鮮の崇儒排仏の思想の学問的なつながりが何らかの形で影響していると思います。参考として朝鮮版の『明心宝鑑』、先ほども冒頭に申し上げましたが、朝鮮では文禄・慶長の役にこの清州本『明心宝鑑』の原本を無くして、その後「抄略本」という原本に比べると約三分の一の内容のものがありますが、その抄略本の中身は完全に儒教化されたものになっていますので、道教の内容も儒教にふさわしい内容に変えて、仏教的なものは一切削除しています。ですから朝鮮では『明心宝鑑』を儒学書としてみなしています。

私も日本の『明心宝鑑』を研究してきましたから、日本留学後、韓国に帰ったら周りから儒学者だという言い回しをされます。それで仕方なく日本の儒学の勉強も本格的にしなければならなくなりました。日本からみれば概論的なものになるかと思いますが、日本の朱子学に関する内容を学会で発表したら、朝鮮儒学の六百年の伝統を持つ成均館大学から注目され、中国、韓国、日本の儒学を扱う二〇〇四年二月に出版された『東アジア儒教文化の新しい指向』という本の日本分野を担当することになりました。

話が羅山の方にもどりますが、阿部氏は羅山が陸象山・王陽明の学を誇り、惺窩の陸象山・王陽明の学を抱擁する学風と対決し、朱子学一尊主義の主張をなしたのは朝鮮朱子学の影響であるとしています。今後この説にはいくつかの疑問を持たなければならないと思います。なぜなら、朝鮮でも命をかけて陽明学を守ろうとした鄭齊斗(一六四九―一七三六)という人もいたからです。異端とされた陽明学を守るために官職を辞めて、韓国の西側、北朝鮮の近いところの島である江華島に閉じこもって陽明学をずっと研究した人でもあります。それ以前すでに李退溪と肩を並べる有名な儒学者、李栗谷(一五三六―一五八四)は、非常に陽明学に傾倒していました。特に李栗谷は、陽明学のみならず仏教にも非常に関心を持って、彼は一時期、北朝鮮にある妙香山のお寺にこもって仏教を研究した痕跡があります。近代に近づいては朴殷植(一八五九―一九二五)、申采浩(一八八〇―一九三六)などの新知識人が陽明学に傾倒するなど、表には出なかったのですが、かげで(陰性的)陽明学は多くの良心的な学者の間で受

容されていました。そして、当時の仏教を軽蔑した儒学者にも尊敬された有名な僧侶の中には四溟堂（一五四四—一六一〇）もいます。あくまでも一部のことで、強調すればやや問題が残りますが、これらの点とも関連した阿部吉雄に対する批判的な立場として、今日いらっしゃっている東海大学の田尻先生がよく研究なさっています。今日お見えになることを知っていたら少し引用しておけばよかったと思いますが、今度論文を書く機会があれば引用して取り入れたいと思います。

羅山が清州本『明心宝鑑』の引用の際に仏教的要素を排除していることと、日本や中国に比べ朝鮮では朱子学を重んじ、一時期、陽明学や仏教を軽視したことから、羅山の排仏思想は、朝鮮書籍を読んだことと関係があると概ね考えています。

このように、朝鮮の書籍を管理し閲覧した羅山の思想と学問活動において、文禄・慶長の役が大きく作用していますが、また文禄・慶長の役の後、朝鮮通信使の交流から朝鮮の思想のみならず朝鮮の歴史、あるいは朝鮮の神話的なものに至るまでの幅広い知識を持っていることから、羅山の思想形成に文禄・慶長の役に朝鮮から渡った書物が大きく影響していることが分かります。例えば中国の唐と古代朝鮮の高句麗との安市城の戦いで、高句麗の有名な乙支文徳という将軍が、侵略した唐の太宗を倒したことで唐軍が退けられたということは、朝鮮の歴史では出ているが、中国の典籍にはでていないが、それはどう言うわけかと羅山は突っ込んで指摘しています。あるいは高麗の最後の忠臣で、人徳が篤い儒学者である鄭夢周という学者が、朝鮮王朝の易姓革命の犠牲になりましたが、朝鮮通信使が学問として文を以て日本の武を軽視しようとしたとき、羅山はその反発として「あなたの国は聖賢と道徳を重んじる国だけれども、なぜ鄭夢周という聖人を特別な理由もなしに政治的な目的で殺したのか」という質問で、朝鮮通信使を非常に当惑させたということです。

この中で特に詳しい朝鮮の歴史思想あるいは神話というものは、文禄・慶長の役に伝わった多くの書物を読んで、さらに新しく得た知識で知識人と同じ話をしたのではないかと思います。ここで朝鮮通信使を取り上げたのは、朝鮮通信使そのものよりはそういう関係をお話しするために取り上げたのですから、羅山と通信使の問答のところは省略いたします。

このように朝鮮からの通信使に接する際の羅山は、すでに文禄・慶長の役に渡っていた書物から得た知識を存分に発揮しました。また、羅山は朝鮮の思想を取り入れながらも自国の神道と結び付け、当時の日本を代表する官僚らしく日本の思想を代弁しようとしていました。その例として、惺窩が中国を「中華」とし、日本を「東夷」とみなしたことに對して、羅山は「神国日本」として日本を神国と位置づけることによって、日本を君子の国として位置づけようとしていました。また、朝鮮通信使に接する際、常に日本側の優位を保つため、朝鮮を「朝貢国」「来貢国」と位置づけました。朝貢国というのは朝鮮通信使そのものも含まれますが、神功皇后の三韓征伐来の神話伝説に基づいたもので、朝鮮に対して常に優越を示そうとしたわけです。

4. おわりに

以上、文禄・慶長の役に渡った書物と接した羅山が、『明心宝鑑』の各篇の内容をまんべんなく引用している『童蒙抄』を中心として考察しました。

このように『童蒙抄』の勸善部および関連啓蒙書の中では、人間の「善・悪」の行為に対する「天あるいは神」による正確な「禍福の応報」に基づくよりは、人間がうちに持つ道徳的能力や道徳意識に基づいた勸善であることが著しいです。また、『明心宝鑑』において、仏教関係の条もありますが、『童蒙抄』ではその条は排除されています。これは羅山の排仏思想に基づいた思想的表明で、『童蒙抄』においても排仏論が反映され、その「勸善思想」は宗教とは結びつけられず、現世主義と人倫重視を打ち出しているといえます。

これらのことは、羅山の排仏思想・学問活動は、文禄・慶長の役に渡った朝鮮の書籍を管理し閲覧したことが大きく影響しているといえます。また文禄・慶長の役の後、朝鮮通信使の交流から、朝鮮の思想のみならず朝鮮の歴史や神話的なものに至るまで幅広い知識を持っていることと、朝鮮からの通信使に接する際、朝鮮の歴史上の出来事の具体的例を取り上げ、中華の典籍にみられないと通信使を当惑させたことなどから、羅山が文禄・慶長の役による朝鮮の書籍を通して得た知識を、知識の表出の一面として考える場合、羅山の思想形成に中国のみならず朝鮮を抜きにしては語れないと思います。

時間がまいりましたので、以上これをもちまして私からの報告を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

司会 それでは最後になりましたけれども、本学のCOE研究員の石黒衛氏から、「近世儒学と中国・朝鮮」ということで、現段階での研究状況も含めてお話しをしていただきたいと思います。